

令和5年度事業報告

令和5年度 事業報告 目次

I. 総括	2
II. 実施事業	3
1. 鳥類等の野生生物保護及び自然保護の精神を育成するための普及啓発活動	3
1-1 バードピア推進事業	3
1-2 企業・自治体・団体の自然豊かな環境作りサポート	3
1-3 愛鳥週間関連行事(愛鳥週間 5月10日～5月16日)	3
1-4 愛鳥懇話会	4
1-5 ビジターセンター等施設における解説・管理等	4
1-6 巣箱架設行事・活動	4
1-7 巣箱架設行事・活動以外の講師派遣	6
1-8 野鳥保護に関するキャンペーン	6
1-9 イベントによる普及啓発活動	7
1-10 普及啓発を目的とした商品の販売促進	7
2. 鳥類等の野生生物保護に関わる調査研究事業	8
2-1 自主調査及び保護研究事業	8
2-2 受託・請負事業	9
2-3 鳥類保護の国際協力に関する事業	11
3. 鳥類等の野生生物保護に関わる個人及び団体による功労の表彰に関する事業	12
3-1 令和5年度愛鳥週間野生生物保護功労者表彰	12
3-2 第57回全国野生生物保護活動発表大会	12
4. 組織及び連盟運営の拡充に関する活動並びに事業	12
4-1 機関誌『私たちの自然』	12
4-2 支部会議の開催	13
4-3 支部間交流会	13
4-4 支部報	13
4-5 日本鳥類保護連盟活動推進ワーキンググループ	13
4-6 ホームページ・フェイスブック・連盟案内	13
4-7 寄附を獲得するための活動	14

I. 総括

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、前年度まで制限せざるを得なかった、本部収支が改善されるような公益事業活動の維持及び発展のための基盤づくりと環境整備を目指した活動を再開することができた。

「全国野鳥保護のつどい」を東京都・虎ノ門ヒルズで開催し、令和5年度野生生物保護功労者表彰の受賞者とその関係者のみを招いて式典を執り行った。「全国野生生物保護活動発表大会」は18校の応募があり、活動が優秀と認められた9校による口頭発表と表彰式を環境省において実施した。

また、調査研究事業についても、国際協力活動についてはしばらく海外に渡航することができなかったが、以前から継続していたフィリピンにおける支援協力活動は、令和4年度末にフィリピンへの渡航が再開でき、令和5年度も継続することで、一定の進展をみた。トキに関する日中協力事業のうち、日本から中国へのトキの移送はやはり実施できなかった。

総体的には十分な本部収支の改善はできなかった。

バードピア事業については、登録者を増やす努力をするとともに、団体登録者のホームページでの紹介や機関誌にバードピアコーナーを設けるなどの取り組みを継続した。機関誌『私たちの自然』は、年間の特集のテーマを人、動物、生態系の健康を持続的にバランスよく最適化することを目的とした「ワンヘルス」とし、読者に人も動物も健康で暮らしやすい環境を作る取り組みを紹介した。

さらに、従来から行ってきた使用済み切手や中古双眼鏡の募集に加え、希少鳥類に対する寄附を呼びかけるだけではなく、サンバ保護のためのクラウドファンディングに挑戦するとともに、さらなる会員獲得に向けた取り組みや、新たな助成金や寄附の獲得に向けた努力を行うなど、安定的な公益事業の基盤づくりに努めた。

これらに加え、理事をはじめとする有識者間で日本鳥類保護連盟の活動推進に関する意見を交換するため、「日本鳥類保護連盟活動推進ワーキンググループ」による議論を行った。

II. 実施事業

1. 鳥類等の野生生物保護及び自然保護の精神を育成するための普及啓発活動

1-1 バードピア推進事業

(1) 団体登録者へのサービス

既存の登録者の中で宣伝を希望する団体をSNSやホームページで紹介するサービスを引き続き行った。

(2) 会員登録の促進

ホームページ、機関誌のほか、野鳥関連商品、ホームセンターと連携した販促物等を通してバードピアについて啓発した。

また、株式会社太平電機の樋口公平社長にアドバイザーを委嘱し、企業の登録数増加を図った。

令和5年度末の登録者数は企業62社、個人217人。

(3) 巣箱調査

令和元年度・4年度にそれぞれ提案・製作した規格の巣箱について利用状況の調査を継続した。

(4) 機関誌のバードピアコーナー

機関誌に「登録者のバードピア紹介」というコーナーを設け、既存登録者や新規登録者のバードピアを訪問、もしくは写真を提供してもらい、バードピア自慢や野鳥などの生きものに利用してもらう工夫などを紹介した。

1-2 企業・自治体・団体の自然豊かな環境作りサポート

所有する敷地内の緑地や社有林を活用して自然環境保全活動に貢献したいと考えている企業や団体向けに、生きものが棲みやすい環境作りや社員向けの環境教育・環境学習プログラムを提案した。

1-3 愛鳥週間関連事業(愛鳥週間 5月10日～5月16日)

(1) 第77回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックでオンラインによる式典が続いていたが、令和5年は5月14日(日)に東京都の虎ノ門ヒルズで対面による式典を4年ぶりに開催した。式典は常陸宮妃殿下ご臨席のもと、野生生物保護功労者表彰の受賞者とその関係者のみを招いて執り行った。

日本鳥類保護連盟総裁賞は、宮古島を中心にサシバなどの野生生物の保護

に尽力されている久貝勝盛氏が受賞された。

(2) 令和6年度愛鳥週間用ポスター原画コンクール

全国の小・中・高校生を対象に、環境省・文部科学省・林野庁の後援を得て実施した。全国から35,344点の応募があった。この中から各都道府県より推薦された406点を審査し、令和6年度愛鳥週間用ポスターの原画となる総裁賞のほか、環境大臣賞などの入賞作品を選定した。

総裁賞にはメジロと春の訪れを描いた富山県立高岡工芸高等学校3年の林則希さんの作品が選ばれた。この原画をもとに令和6年度愛鳥週間用ポスターを制作し、各都道府県に配布した。

(3) 愛鳥週間関連各種普及啓発事業

新型コロナウイルス感染症が収束傾向となり、愛鳥週間の前には5類に移行して感染対策の規制緩和が徐々に進んだ状況となった。これを受けて、愛鳥週間における普及啓発事業を、自然観察会、探鳥会、愛鳥週間用ポスター展、愛鳥写真展及び表彰など、可能な範囲で実施した。

1-4 愛鳥懇話会

新型コロナウイルスの感染が収束傾向にあることから、参加者を限定し、12月7日(木)に日比谷松本楼において、常陸宮殿下同妃両殿下の御臨席を賜り、約30名の参加者ととも愛鳥懇話会を開催した。「令和6年度愛鳥週間用ポスター原画コンクール総裁賞」を受賞した林 則希さんに総裁賞の授与を行った。

1-5 ビジターセンター等施設における解説・管理等

釧路湿原国立公園の環境省施設である、温根内ビジターセンターと塘路湖エコミュージアムセンターの管理運営業務を環境省から、また、釧路湿原国立公園自然ふれあい活動業務を釧路湿原国立公園連絡協議会から請け負い実施した。専門の職員を4名配置し、施設の維持管理や併設されている遊歩道の管理を行った。令和5年度は来館者数がコロナ禍前まで回復して賑わいを取り戻した。季節の自然情報を施設内やSNSなどで情報発信したほか、自然観察会や地域の学校等への環境学習を実施し、ワイズユース(賢明な利用)の理念のもと、普及啓発活動に努めた。また、各施設周辺の自然情報を発信する目的で、「月刊 温根内通信」と「月刊 やちまなこ」を発行した。なお、この活動は釧路支部が行った。

1-6 巣箱架設行事・活動

新型コロナウイルスの感染が収束傾向となったことから、可能な範囲で、参加者数の制限、実施時間の短縮など、十分な感染防止対策を講じたうえで

巣箱架設事業を行った。児童向けプログラムでは巣箱作り、巣箱架け、巣箱調査を行った。

(1) 憲政記念館の巣箱架け

新型コロナウイルスの感染拡大前までは鳥類保護議員懇話会(事務局長：今村雅弘衆議院議員)との共催により、同懇話会に所属する国会議員のほか、環境省、千代田区の小学生の参加、協力を得て、国会議事堂前の憲政記念館北庭園で巣箱の架設行事を実施していたが、新型コロナウイルスの感染拡大以降中止が余儀なくされていた。令和5年度は感染症が収束傾向となったが、小学校の長引く課外授業の中止体制から、課外授業の体制が整わず昨年度に続き中止となった。

(2) 麴町小学校・お茶の水小学校(講師派遣)

これまで巣箱調査、巣箱作りを行っていたが、新型コロナウイルスの感染拡大以降中止が余儀なくされていた。令和5年度は新型コロナウイルスの感染が収束傾向になったが、課外授業の体制が整わず昨年度に続き中止となった。

(3) 新宿御苑(環境省 新宿御苑管理事務所 共催)

11月26日(日)に巣箱調査、12月17日(日)に巣箱作りと巣箱架けをそれぞれ実施した。

参加者：11月26日 33名、12月17日 32名

(4) 所沢航空発祥記念館・所沢航空記念公園管理事務所(講師派遣)

9月16日(土)に巣箱調査、11月23日(木・祝)に巣箱作りをそれぞれ実施した。

参加者：9月16日 25名、11月23日 35名

(5) まちの保育園(講師派遣)

12月20日(水)に巣箱調査、1月17日(水)に巣箱作りと巣箱架けをそれぞれ実施した。

参加者：12月20日 19名、1月17日 19名

(6) イオンモールにおける巣箱架け事業

イオンモール株式会社からの請け負いで、10月14日(土)にイオンモール成田、11月4日(土)にイオンモール土岐、11月18日(土)にイオンモール東員で来客者を対象に、巣箱作りと巣箱架けのイベントを行った。

1-7 巣箱架設行事・活動以外の講師派遣

新型コロナウイルスの感染が収束傾向となったことから、講師派遣依頼が従前のように戻りつつある中、十分な感染防止対策を講じ、可能な範囲で講習を行った。

(1) NHK文化センター青山教室「はじめてのバードウォッチング」

10月5日(木)オリエンテーション(於: NHK文化センター青山教室)[参加者7名]、10月12日(木)新宿御苑[参加者17名]、11月9日(木)石神井公園[参加者17名]、12月7日(木)国営昭和記念公園[参加者17名]、1月11日(木)東京港野鳥公園[参加者18名]、2月8日(木)井の頭恩賜公園[参加者18名]、3月7日(木)多摩森林科学園[参加者18名]

(2) すぎなみサイエンスLabo「鳥の世界へようこそ!! 鳥のヒミツを教えます」

後援: 杉並区 企画・実施: NPO法人-サイン-

6月11日(土) 杉並区立高円寺学園[参加者30名]

(3) 中学生フューチャーサイエンスクラブ「初めての鳥の世界 -見て、触って、鳥を知ろう!」

主催: 杉並区教育委員会

7月28日(金) 杉並区立高円寺学園[参加者57名]

(4) サイエンスくらぶ「巣箱作り教室」

主催: サイエンスくらぶ

9月2日(土) 杉並区立向陽中学校敷地内KSCCクラブハウス[参加者24名]

(5) 森ビル株式会社からの請け負いで、親子ワークショップ2023in企業と環境展「都会で見られる身近な鳥や、六本木ヒルズの屋上庭園をのぞいてみよう!」を実施した。[参加者26名]

1-8 野鳥保護に関するキャンペーン

(1) 「ヒナを拾わないで!!」キャンペーン

令和5年度で29年目を迎えた当キャンペーンを、4月1日から7月31日までを期間とし、当連盟、(公財)日本野鳥の会、NPO法人野生動物救護獣医師協会3団体の共催及び環境省の後援により実施した。都道府県及び企業・団体の協賛、協力を得て、普及啓発ポスターを3団体で作成し、自治体、学校、公共施設、動物病院などに合計107,733枚配布した。

(2) 全国一斉テグス（釣り糸）ひろい2023

5月1日から10月31日までを全国一斉にテグス拾いを呼びかける期間として、海岸、河川及び湖沼など7都府県、11地点において、本部・支部、会員及び専門委員のほか、関係団体並びに一般の参加を得て、放置されたテグスなどの回収を行った。

回収されたテグスの総量：709g 長さに換算して9,217m(1g=13m)

テグス以外：釣り針、ルアー、ワーム、おもり、撒き餌カゴ、ウキ、擬似餌、サビキ、金具類、釣り具類包装紙、釣り竿、天秤等。

5月21日（日）には連盟本部主催のテグス拾い活動を東京都の葛西海浜公園で行った。SNSや機関誌で参加を呼びかけたところ、27名の方にご参加いただき、多くのテグスや釣り針などを回収することができた。

1-9 イベントによる普及啓発活動

愛鳥思想の普及啓発を目的としてイベントの実施または参加をした。

(1) ジャパンバードフェスティバル

11月4日（土）5日（日）千葉県我孫子市

(2) すぎなみサイエンスフェスタ

3月3日（日）杉並区IMAGINUS（イマジナス）

(3) 人とみどりと野鳥のつどい（岡山県支部）

4月29日（土）岡山県自然保護センター

(4) 野鳥写真コンクール（岡山県支部）

7月28日（金）岡山県立図書館

1-10 普及啓発を目的とした商品の販売促進

野鳥カレンダー、野鳥シート、バードピンズ及び音声再生録音ペン(G-Speak)などの既存の商品の他、取扱商品の拡充に努めるとともに、オンライン注文充実のため体制を整えた。また、企業とのタイアップによる新商品の企画提案、制作を行いオリジナル商品として販売を行った。

2. 鳥類等の野生生物保護に関わる調査研究事業

2-1 自主調査及び保護研究事業

(1) コアジサシの渡りルート解明に関する調査

コアジサシ研究センターとして以下の調査研究事業を行った。

絶滅危惧種コアジサシの渡りルートや中継地、越冬地を把握して保護に役立てることを目的として、平成25年度からジオロケーター(渡りルートを把握するための機器)をコアジサシに装着、平成27年度からはより詳細なデータを得るためにGPSロガーを装着してきた。令和5年度はこれらのデータロガーを回収するには至らなかったが、茨城県南部の海岸や沖縄県南部において、ジオロケーターの装着に協力した。

(2) 奄美大島における調査・研究活動

鹿児島県奄美大島において、絶滅危惧種であるアマミヤマシギとオーストンオオアカゲラの保全のための調査研究を実施した。この活動は令和5年度で3年目となる。アマミヤマシギは移動生態を調べるもので、令和4年度には、沖縄島で捕獲した3羽の内1羽が奄美大島に渡ったことが初めて確認された。令和5年度は沖縄島で捕獲を試みたほか、喜界島で生息の有無について確認調査を行ったが、成果には至らなかった。

オーストンオオアカゲラについては、令和3年度に実施した全島調査の補足調査及び密度調査を行ったほか、GPSを装着して5羽から繁殖期の行動圏について情報を得た。行動圏についてはこれまで8羽から情報が得られたため、日本鳥学会大会で行動圏に関するポスター発表を行った。この活動はサントリー世界愛鳥基金とLUSHのRe:Fundからの助成を受けて実施した。

(3) 奄美大島におけるサシバの調査

NPO法人奄美野鳥の会、奄美の自然を考える会、アジア猛禽類ネットワーク、(公財)日本自然保護協会、(公財)日本野鳥の会と協働で、奄美大島のサシバの越冬地としての重要性を示すため、令和3年度からサシバの越冬数調査を行っているが、令和5年度も個体数推定のための補完調査を実施した。また、奄美の自然を考える会を除く上記団体と協働で、奄美大島においてサシバがどこに渡っているかを把握するため、11羽にGPSタグの装着を行った。これらはLUSHのRe:Fund、READYFORのクラウドファンディングの支援者、DRUIDからの支援で実施した。

(4) シマフクロウ保護のための活動

国内希少野生動植物種に指定されているシマフクロウは北海道内で現在

100つがい（環境省2023）が確認されている。連盟では国が策定した「シマフクロウ保護増殖事業計画」に基づいて環境省・林野庁から種々の保護事業を請け負い、主に、シマフクロウのヒナへ足環を装着する標識調査、給餌池に生きた魚を放流する給餌作業、全道に現在180個ほど設置されている巣箱のメンテナンス・新規設置、国有林内の生息地の巡視などを行った。

(5) ワカケホンセイインコの調査・研究

東京近郊に生息している外来種ワカケホンセイインコの繁殖生態を調査するために巣箱に営巣した個体の巣箱内での様子を映像で記録し、産卵の間隔に対して孵化、巣立ちの間隔に差異があることなどについて知見を得たので、日本鳥学会でポスター発表を行った。また在来種との競合を把握するために東京都市大学と協働でワカケホンセイインコの糞からDNA解析を行い、餌資源を分析して生態学会でポスター発表を行った。

(6) 専門委員活動

鳥類保護に関心や経験を有し、指導力、実践力のある方や、鳥類を主とする観察会、または鳥類調査についての知識と経験を有する方に委嘱しており、機関誌などへの情報提供及び地域の愛鳥思想普及啓発活動と呼び掛けた。

(7) 支部の調査活動

神奈川県支部、石川県支部としてツバメ調査に関わった。富山県支部として12月にハクチョウ一斉調査を行ったほか、富山県のガンカモ調査にも協力した。

2-2 受託・請負事業

環境省等国の機関、地方公共団体及び企業から、シマフクロウ保護増殖事業をはじめとした鳥類調査の業務・事業を受託または請け負って実施した。

(1) シマフクロウ保護増殖事業(再掲)

国が策定した「シマフクロウ保護増殖事業計画」に基づき、シマフクロウを絶滅の危機から救うため、環境省、林野庁、標茶町の受託又は請負事業として、主に釧路支部において、給餌池への活魚の給餌、巣箱の設置、雛への標識調査、監視・生息状況調査などを実施した。

(2) 地方公共団体及び企業からの請負事業

サントリー天然水の森の鳥類調査(サントリーホールディングス株式会社)、国指定天然記念物の十三崖のチョウゲンボウ繁殖地の調査(中野市)など、鳥類に関する調査を請け負い実施したほか、森ビル株式会社(再掲)、イオンモール株式会社(再掲)より巣箱架けの事業を請け負い実施した。

令和5年度受託・請負事業一覧

区分	事業名	担当	発注者
I 受託事業	1 令和5年度全国野鳥保護のつどい記念式典等実施業務	本部	環境省
	2 令和5年度日中トキ生息保護協力業務	本部	環境省
	3 令和5年度シマフクロウ保護増殖事業 (生息状況調査・給餌・巣箱設置等業務)	釧路	環境省 釧路自然環境事務所
	4 令和5年度シマフクロウ保護増殖事業 (管内生息地確立及び拡大業務)	釧路	環境省 北海道地方環境事務所
	5 令和5年温根内ビジターセンター解説・管理業務	釧路	環境省 釧路自然環境事務所
	6 令和5年塘路湖エコミュージアムセンター解説・管理業務	釧路	環境省 釧路自然環境事務所
	7 令和5年度希少野生動植物種保護管理事業 (シマフクロウ)	釧路	林野庁 根釧東部森林管理署
	8 令和5年度希少野生動植物種保護管理事業 (シマフクロウ)	釧路	林野庁 根釧西部森林管理署
	9 令和5年度釧路湿原保全巡視業務	釧路	標茶町
	10 鳥獣生息分布調査	岡山	岡山県
	11 愛鳥ポスターコンクール	岡山	岡山県
	12 令和5年度 国庫補助事業 中野市十三崖のチョウゲンボウ 繁殖地天然記念物再生事業 モニタリング調査業務	本部	中野市
II 請負事業	1 サントリー天然水の森 鳥類調査	本部	サントリーホールディングス(株)
	2 ウルトラトレイル・マウントフジコース周辺鳥類生息状況調査	本部	NPO法人富士トレイルランナーズ倶楽部
	3 志賀高原ホテルタキモトでの巣箱・水場メンテナンス	本部	志賀高原ホテルタキモト
	4 環境省 令和5年度「脱炭素×復興まちづくり」FS委託業務	本部	アジア航測株式会社
	5 令和5年度釧路湿原国立公園自然ふれあい活動業務	釧路	釧路湿原国立公園連絡協議会

2-3 鳥類保護の国際協力に関する事業

(1) フィリピンにおける国際協力事業

フィリピン共和国(以下、フィリピン)において、NGO がボランティアで実施しているサシバ等の保護活動に協力するため、平成 28 年度から中古双眼鏡の募集を行い、寄附された双眼鏡をフィリピンに寄贈しているほか、平成 29 年度からは経団連自然保護基金からの助成を受けて日本と関わりのある渡り性猛禽類を保護するため、調査や植樹活動を行ってきた。令和 2 年度からはルソン島中部ヌエバビスカヤ州におけるサシバの密猟対策のための活動を実施しているが、令和 5 年度は令和 6 年 2 月 12 日(月)から 15 日(木)までヌエバビスカヤ州の関係行政、大学等を訪問し協力の確認を行ったのに加え、ここで行われているサシバの密猟を撲滅するために、ヌエバビスカヤ州知事と連盟、地元団体のラプターウォッチネットワークの間で、ヌエバビスカヤ州立大学学長が立ち合いのもと覚書を交わした。

(2) ネパールにおける国際協力事業

令和元年度から3年度にかけて、地球環境基金の助成を受けてネパール連邦民主共和国(以下、ネパール)において、現地の鳥学会が自分たちで資金を集めて保護・研究活動を継続していけるよう、アジア猛禽類ネットワークと協働で、エコツアーのための基盤づくり、知識・技術、必要機材の提供、普及啓発用のリーフレット及びステッカーの作成、配布などを行ってきた。この活動は新型コロナウイルス感染拡大により、ネパールでもロックダウンが実施されたため、初年度を除き日本からネパールへ移動することができなかった。そのような中、目標達成のために現地の鳥学会のメンバーだけでできることを検討し、渡りの調査、GPSによって追跡した調査結果のとりまとめ、新たな観光資源の発掘などを業務委託という形をとって実施した。令和4年度以降、改めて現地に行き、フォローアップの活動実施を検討しているが、令和5年度も現地との調整が滞り、実施することができなかった。

(3) 日中トキ協力事業

「日中共同トキ保護計画」に基づき、環境省の受託業務として、中国における野生のトキ個体群の保護・回復、生息環境の保護・整備、飼育下個体群の育成及び野生復帰を効果的に進めるとともに、日本の佐渡における野生復帰の取組みの参考とするために必要な調査、協力等の業務を目的とし、日中トキ生息保護協力に関する関連情報の収集を行ってきた。令和5年度は、中国から送られてきた報告書を取りまとめ、「日中トキ生息保護協力業務報告書」として環境省に提出した。

トキを佐渡トキ保護センターから中国北京へ輸送する業務については、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、昨年度に引き続き延期となった。

(4) 国際サシバサミット

渡り鳥であるサシバを国際間で守っていくため、日本の主要な自然保護団体が力を合わせてサミットを開催しており、連盟も参画している。第1回は令和元年5月に栃木県市貝町で開催され、その後令和3年10月に第2回が沖縄県宮古島市で開催された。令和5年度は第3回が10月に台湾で、第4回が令和6年3月にフィリピンのサンチェスミラで開催され、連盟も参画した。本活動はLUSHのRe:Fundの助成を受けて行った。

3. 鳥類等の野生生物保護に関わる個人及び団体による功労の表彰に関する事業

3-1 令和5年度愛鳥週間野生生物保護功労者表彰

5月14日(日)に東京都の虎ノ門ヒルズで第77回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」を対面で開催し、その一環で功労者への表彰を行った。

3-2 第57回全国野生生物保護活動発表大会

令和5年度は、全国の小・中・高あわせて18校から応募があった。応募校には活動PR資料として動画または報告書を提出していただき、連盟HPで公開して一般者の投票も実施した。活動PR資料をもとに専門家及び関係省庁で審査し、優秀とみなされた9校に環境大臣賞(3校)、文部科学大臣賞(2校)、林野庁長官賞(2校)、(公財)日本鳥類保護連盟 会長賞(2校)をそれぞれ授与した。11月29日(水)には環境省において本大会を実施し、受賞校9校が活動内容や日ごろの成果を発表した後、専門家、関係省庁を交えて意見交換を行った。

4. 組織及び連盟運営の拡充に関する活動並びに事業

4-1 機関誌「私たちの自然」

発行回数：機関誌を6回発行した。(2023年5・6月号 No. 646～2024年3・4月号 No. 651)※隔月発行。

発行部数：1,800部

配布先：会員、愛鳥モデル校、自然保護団体、都道府県自然環境担当部局及び教育委員会等。

編集会議を行い、誌面の充実を図るために協議し、特に以下のことに留意し誌面づくりを行った。

・令和5年12月までの特集のテーマを「ワンヘルス」とした。令和6年1月か

らは「共存・共生」をテーマとした。

- ・わかりやすい誌面づくり(中学生が読んでも理解できる程度の内容)を心掛けた。
- ・寄附を募るためにも、当連盟の活動を分かりやすく読者に紹介し、読者の理解を得るように努めた。
- ・FacebookやTwitter(X)、Youtubeと連携した内容を盛り込むことで、SNSへの誘導を試みた。
- ・会員の継続手続き負担軽減及び会費の滞納防止の観点から、機関紙にチラシを同封してSyncableのシステムを利用したクレジットカードでの会員継続を促した。

4-2 支部会議の開催

11月1日(水)、本部と支部間及び支部相互間の協力・連携をさらに図っていくことを目的として、支部会議を開催した。令和4年度までは新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインでの開催であったが、令和5年度は対面とオンラインのハイブリットで開催した。対面では釧路支部と富山県支部、山梨県支部が出席、オンラインでは岩手県支部、神奈川県支部、連盟京都、広島県支部、山口県支部が出席し、情報共有、今後の取り組みについての意見交換などを行った。

4-3 支部交流会

11月11日(土)、京都市において本部、連盟京都、富山県支部、石川県支部、福井県支部、広島県支部がつどい、支部間の交流会を行った。各支部から活動報告を行い、意見交換、情報交換を行った。

4-4 支部報

富山県、福井県、石川県、山梨県、茨城県、神奈川県、連盟京都の各支部が、支部報「らいちょう」、「こうのとり」「朱鷺」、「うぐいす」、「かわせみ便り」、「フレンドリー」「うぐいす」をそれぞれ発行し、各地域の愛鳥思想普及啓発を推進した。

4-5 日本鳥類保護連盟活動推進ワーキンググループ

連盟の活動を推進していくため、ワーキンググループで意見交換を行った。

4-6 ホームページ・フェイスブック・連盟案内

(1) ホームページ

連盟の活動をアピールするために、随時トップページのトピックスやニュー

ースを更新したほか、団体概要、入会案内、寄附、活動紹介、商品について最新の情報を提供できるよう努めた。

ホームページ内に会員専用ページを公開し、会員限定で『私たちの自然』過去1年分のバックナンバーPDFを閲覧可能にした。また、会員価格専用のオンラインショップを設置した。

(2) Facebook・Twitter(X)

本部、支部の活動や鳥類に関する記事などを掲載し、普及啓発に努めた。

(3) 連盟案内

ホームページの内容のエッセンスを紙媒体にし、連盟を知ってもらうためのツールとして活用した。

(4) メーリングリスト

寄附者を対象としたメーリングリストで、連盟の活動や鳥に関わる豆知識などを配信した。

4-7 寄附を獲得するための活動

(1) 第5回シマフクロウ保護のためのステッカーデザインコンテスト

令和5年度はNPO法人シマフクロウ基金にも審査に加わっていただき、本田直人さんの作品「森の守り神」が最優秀賞に選ばれた。そのデザインでステッカーを制作して募金箱と共に温根内ビジターセンター等に設置し寄附をいただいた方に配布した。

(2) クラウドファンディングの実施

サシバを保全していくための調査・研究として、7月20日(木)から8月31日(木)まで、「国内で越冬する絶滅危惧種サシバの新たな保全プロジェクトにご支援を！」をタイトルにREADYFORでクラウドファンディングを実施し、寄附金を集めた。

(3) オンライン寄附への登録

オンラインで寄附を集めていくため、登録しているREADYFOR、Syncable、Yahoo!ネット募金、Give One、Osusoを通して寄附を募った。

(4) その他

普及啓発活動及び調査・研究事業を円滑に行うため、個人や企業を対象として使用済み切手、巣箱事業等の各事業に対する寄附、中古双眼鏡(再掲)等物品を含む寄附を募った。